

つがる市稲垣付近

<1960年>

青森県立美術館所蔵



一枚の 七のたけ

Ichimai no
Monogatari

ウールの角巻に履の下までく
るみ、長靴を履いた4人の女が
雪道を選かかっていく。日は高
いが、立ち込めた真雪に半は隠
れ、夜のようにも見える。

1960年1月、青森県つが
る市稲垣付近。青森市のアマチ
ユ写真家・小島一郎(192
4-64年)の1枚だ。カメラ店
を営みつつ、厳冬の津軽野に通
って撮影した。「ライカIIを
アライツクのポケットに入れ、
一旦に千キロから三千キロを
歩いた。妻弘子(33)のエッセ
ー集「暖かい陽射し」による
と、撮影行は過酷だった。

「見るもの心まわしつゝかみ
するウールの写真」。青森
県立美術館学芸主任・高橋け
み(33)は、小島の写真をこう評
する。「稲垣付近」では「消失

点に向かう選近法が使われてい
て、この世でない世界に行こう
としているかのようなドラマが
見える。前の3人の中央に背
の高い女性がいる、三角形の構
図も美しい。だが気高さや神秘
性が生まれたのは、暗室での総
作りが大きい。「逆光で風景を
捉えようと普通は人物が真っ黒
で、空が真っ白に飛ぶ。小島は
覆い焼きを駆使してまず人物を
焼き込み、次いで雲や太陽を焼
き込むことで、鉛色の重苦しい
空を表現しているのだ」と

なぜ津軽野だったのか。背景
には、戦争の影があった。44年
7月、19歳の小島は徴集され、
弘前編成の第47師団に入營。歩
兵第131連隊第1機関銃中隊
に配属され、中国湖湖首などで
交戦した。記録によると、連隊
で625人が戦死、戦病死する
過酷な戦場だった。終戦時は軍
曹。自身は予備士官学校にいて

難を免れたが、原隊は敵戦4カ
月後の45年12月にも共産軍と
戦い、多くの死者を出した。

さらに翌年、敗戦兵として帰
還した青森は、焼け野原となっ
ていた。「戦士化した故郷の
町に立った時、私の目に入った
ものは焼木の変な形と、点在
する焼トタンの小屋ばかりであ
った(「私の撮影行」)。虚
脱状態の中で代用教員を務めた
り食糧配給公団の事務所で販売
事務を担当したりしたが、身が
入らな。買い出して津軽の戦
友宅を訪ねたのは、そんな時だ
った。「広田とか空豆が鬼ど
か牛を見ても癒やされたくでし
ょう。相対戦争で精神がやられ
たんですわ」と弘子は言う。

美しく澄んだ空。天高く燃え
上がる雲。大地に延々とクワを
入れつゞき暮れまで働く農民だ
ち。風景や人々の姿に「激しく
私の胸をうつもの」(同)を感

じた小島は、つかれたように津
軽野を撮りはじめた。

その写真に写真界の大御所
だった名取洋之助(1910-
82年)が目を見留めた。「平凡な
対象から非凡なものを見出す目
と、平凡なジャンルによって強
い写真を撮る腕」を評価し、58
年に東京・銀座で開いた初の個
展「津軽」に協力。カメラ雑誌
のグラフィックに次々と写真が載る
ようになり、61年にプロを目指
して上京した。同年、カメラ芸



小島一郎

術新人賞を受賞。63年には作家
の石坂洋次郎らと共に著書「津軽十
詩・文・写真集」を出した。

そんな折、師と仰ぐ名取が62
年に死去。都会暮らしに「神経
がすりへっていくような思い」
(「東京の夕日」)だった小島
は妻を青森に帰し、北海道で
の撮影に懸けた。だが暖冬で思
うように撮れない。体調も悪化
し、64年に故郷の家族の元に戻っ
た。「オレは建築の写真をや
りたいなあ」と(弘子)。
アパートに暗室を作り再出発を
期したが、64年7月7日未明、
異変が起きる。「アパートで寝
ていたら急に苦しくて、そのま
ま……」と長女道子(69)が話す突
然の死。39歳だった。

没後に半ば忘れられていた小
島に光が当たるのは、2009
年のことだ。県業で回顧展「小
島一郎 北を撮る」が開かれ、
写真集「小島一郎写真集成」が
出たのが契機となった。美しい
写真は、多くの人の心をとらえ
た。展示を企画した高橋は、そ
こには「都市と地方の格差が広
がる時代の憂鬱が写っている」
と言う。「不安を感じながら撮
るから、鉛色の空になってしまう。
美しいんだけど悲しい
写真なんです」(敬称略)

「つがる市稲垣付近」は青森
県立美術館で開催中のコレクシ
ョン展「生誕100年・没後60
年 小島一郎 リターンズ」で
展示されています(9月29日ま
で。毎月第2、4日曜休館)。

一枚の写真の背後には、時に思
いもかけられないドラマや、忘れるこ
とのできない思い出が隠れているま
す。一人で活躍する写真家から市
井の人々まで、さまざまな人が印
画紙に刻んだ「一枚のもの(た
り)」をひもともといっています。
(第2土曜日に掲載します。次
回は8月10日です)

1963年春、東京都府中市立府中第四小学校。6年5組の社会科の最終授業で担任・浦沢尚が教壇に立ち立ち、クラウ雑誌を開いて見せた。「人間が人間にこういことをしたとき、あなたたちは忘れなでほしい」

「原爆被害の初公開」と銘打たれた「アサヒグラフ」52年8月6日号。「広島 原爆犠牲都市第一号」と見出しのついたページには、顔や体を燃やされ、口や

一枚の
七の如く
Ichimai no
Monogatari



浦沢尚先生 <1959年>

に奪かれた少女の姿があった。「その時の浦沢先生の目と写真が忘れられません」。村田真知子(73)は、この目をきっかけに被害者に関心を持ちはじめた。高校生になると友人と広島、長崎を訪問。31歳で東京の被爆者団体「東京友会」の相談員になり、今も理事として会を支える。「浦沢先生の一言がなかったら、私はここにいない。人生の師です」

口癖のように「人間にはいいはないことがある」と語っていた浦沢。原爆投下は、究極の「してはいけないこと」だった。

1958・59年、四小の浦沢字級に通い詰めた若いカメラマンがいた。東京写真真木(現東京芸芸大)の学生だった中村太郎(40・

人間にはしてはいけないことがある

浦沢はどんな教師だったのか。「子供がいなかったら全責がわが子。人情家ぞ、面倒見がとことんいい先生でした。よく叱られ

た。」「子供がいなかったら全責がわが子。人情家ぞ、面倒見がとことんいい先生でした。よく叱られた」と優しく笑む浦沢。「先生だいきき」と、浦沢に抱きつく女の子。立たされたのに何だかうれしそうなお兄さん。取組め合いのけんか。写真から、学校の飾らない姿が伝わってくる。浦沢に「君たちのお兄さんだ」と紹介された中村となじみ、誰も撮られていることを意識してはなかった。

被爆体の子供たちを探し、多磨霊園前で石材社を営む山田忠勝(73)に会った。図録に目を通すなり「あ、これ私です」。教科書を読む立ち姿を横から写した一枚。奥に浦沢が座っている。「3年4組です。懐かしいなあ」

図録の表紙は、浦沢が唯一、カメラ目線で写った一枚にだけ。被爆体の子供たちを撮り、多磨霊園前で石材社を営む山田忠勝(73)に会った。図録に目を通すなり「あ、これ私です」。教科書を読む立ち姿を横から写した一枚。奥に浦沢が座っている。「3年4組です。懐かしいなあ」

2023年)。自身も府中一小で教員だった。中村は7カ月間に約2100枚を撮影。しかし発表することはなく、いつしか記憶の奥にしまいこんだ。それを思い出したのは、40年以上後の2002年、1996年に71歳で没した浦沢の七回忌の場だった。浦沢の妻から「あなたが持っていた方がいい」と、箱に入った空箱焼き(コンタクトプリント)を渡された。2009年春、東京のフォトサロンで開いた作品展「浦沢先生と多磨の子供たち」で89枚を展示した。

中村太郎

一枚の写真の背後には、時に思ってもかかれないドラマや、忘れられないこと。一紙で活躍する写真家から市井の人々まで、さまざまなのが印刷紙に刻んだ「一枚のものかたり」をひもといっていきます。(第2土曜日に掲載します。次回は9月14日です)

た。」「山田は、そう話す。浦沢を慕い、亡くなるまで交流を続けた。だが晩年の闘病中、家に居残った時は会えなかった。「必ず元気になるから待つてくれ」と、妻を介して伝えられたが、ついに回復はかなわなかった。「約束を守る先生だからだよ」。そう言うとき、声を詰まらせた。葬儀は、山田から教員が営んだという。

村田が覚えてるのは、給食がない頃、身体が背広のポケットをはんばんに膨らませた浦沢の姿だ。「(弁当がなくて)教室を出て行く子がいたんですよ。先生はポケットのおにぎりを、その子たちにそっと渡していました」。被爆体の一人、村野豊次(77)は、放課後にいったん帰宅し、幼い妹を背負って学校に戻った。「先生が妹を背負ってくれて、私が遊ぶんです」。情いも浦沢が妹をおんぶし、手をつないで駅まで送ってくれたという。自らも教職の道に進んだ村野は「方向付けをしてくれたのは先生です」と話す。



作家三島由紀夫(1925-1970年)の邸宅は、東京・馬込の丘の上にあった。1961年9月、28歳の新進気鋭の写真家細江英公(91)は22歳の助手森山大道(85)を伴い、この家に36歳の三島を訪ねた。三島の初めての評論集「美の襲撃」の口絵のための写真撮影を頼まれていた。

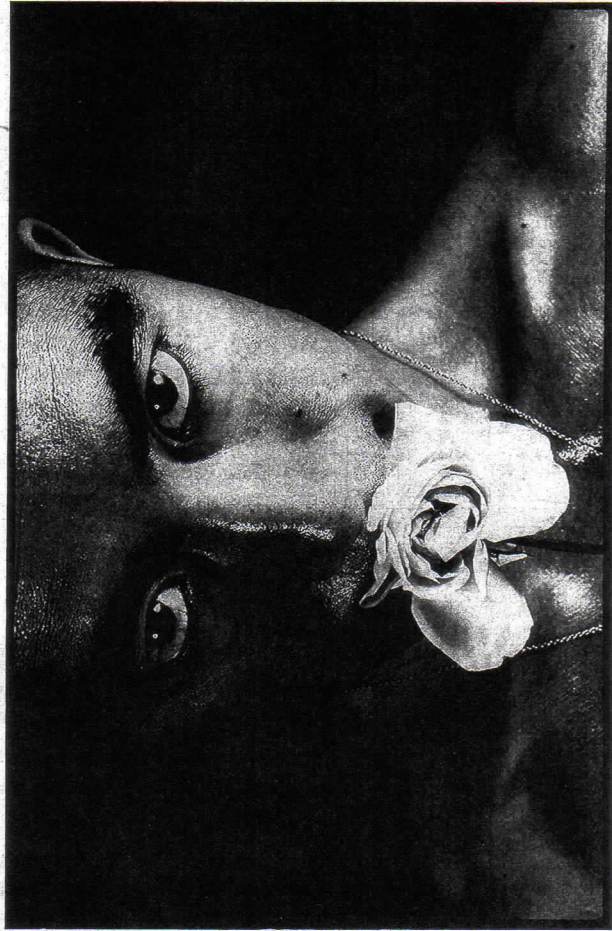
「玄關脇のクランタには白り丸テーブルの椅子があって、上半身裸の三島氏が黒いサンダースをかけて日光浴をしていた(「薔

一枚の薔薇

Ichimatsu no
Menogatari

薔薇刑 作品32 <1961年>

©細江英公



薔薇刑「撮影ノート」)。細江の振舞は、舞踏家土方謙をモデルにした写真に魅了された三島の指名だった。「ぼくはあなたの被写体になるから、好きなように撮ってください」。言葉を得た細江は、三島の父平岡梓(当時(86))が散水用に使っていたホースを借り、それを裸の三島をぐるぐる巻きにして上から撮った。こうして写真はじめて撮ったよ。でも何故フィルムがなくて巻きつけたの?。半ばあされた顔で三島に問われた細江は「偶像破壊ですよ」と答えた。三島は細江とこの一枚を気に入り、無事口絵に収まった。

三島の撮影体験に刺激を受けた細江は、こんどは自分から撮らせたいと頼んだ。三島は快諾し、半年間の撮影が始まった。

ギターヒルで筋骨隆々だった

三島がくわえた赤い薔薇

三島のヌードだけでなく、ルネサンス期の絵画を背景に敷いた裸の女性も撮らわらせた。絵の中に三島を紛れ込ませたりして、細江の発想は大胆で自由だった。

「おつた。私が連れていかれたのは、ふしぎな一個の都庁であつた。この国の地図にもなく、おそろしく静かで、白鳥の広場と死とエロクがほしきままに戯れているような都庁。(略)これは細江氏の、カメラによるその紀行である」「それ(撮影)は心の躍るやうな経験であり、私がいちも待たされてゐた状況であつた」

「薔薇刑」の序文「細江英公序説」で、三島は細江との撮影の日々をこう振り返っている。



中でも印象的な一枚が、薔薇を口にくわえ、正面を凝視する三島をとりこんだ作品だ。とにかく目の力が強い。三島には、まばたきをせずに数分間、じっと目を開けていようかできるという特技があった。「フィルムを強く凝視して下をいと言つて、美に眼を盲開いたそのままで、ぼくが35mmフィルムの上本36枚を撮り終るともまだまばたきしない。(略)もともと強く見せられて、もっと強く見せられたら本目の撮影を終えた。氏はそのときじめて眼をまばたいた(「薔薇刑」撮影ノート)」

独特の肌色には、ミニコンというフィルムの効果だ。「書類とか文庫を撮影するための特殊なフィルムです。鮮鋭度が高く、シャープ。白と黒に少し階調が出るとくに現像している。普通の肌は通

つてメタリックな肌に見えるでしょう。ハイコントラストで、硬質な感じなんです」。大学院時代に細江に師事した東京大学天の学長吉野弘章(89)が解説する。

この一枚は、どうしてのものにして撮られたのか。森山に質問したところ、メールで回答があった。「飯倉(港区)のヌタオで撮ったものだと記憶しています。ライトを当てたり、助手としての仕事か忙しかつたのを覚えていますが、ハイコントラストに硬調の印刷紙を使うことなどは、すべて細江の指針だったといふ。薔薇は白か、薄い色に見える。だが、森山によると「赤い薔薇でした」。

「薔薇刑」の写真が初めて公開されたのは撮影終了の翌年1月、銀座で開催されたグループ展「NON」展でのことだ。細江が三島に要を頼むと、すべてはなを届いた。「男と薔薇」「麗麗運走曲」…。10ほど並んだ案の終わりの方に「薔薇刑」があり、細江は即座にそれに決めた。63年には写真集「薔薇刑」が出版された。

さらに横尾忠則(88)の著上りで国際版(新編版)を出すことになり、70年秋、章立てや配置を組んだ。三島は「章のつけ方だけは僕に任せてくれ」と言い、「海目の目」「目の罪」などに統一し、最終章を「死」とした。章図は想像するほかない。45歳の三島が、東京・市谷の陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地東部方面總監室で刺陣自殺したのはそれから間もなく、11月20日のことだった。(敬称略)



細江英公

木口博子撮影

一枚の写真の背後には、時に思い、かたはらうらやま、溢れるほどの思いが隠れています。一機で活躍する写真家から市井の人々まで、さまざまな人が印刷紙に刻んだ「一枚ものたり」をひとつひとつ集めていきます。(第1土曜日に掲載します。次回:10月12日です)